

①現状(サンドリサイクル実績)

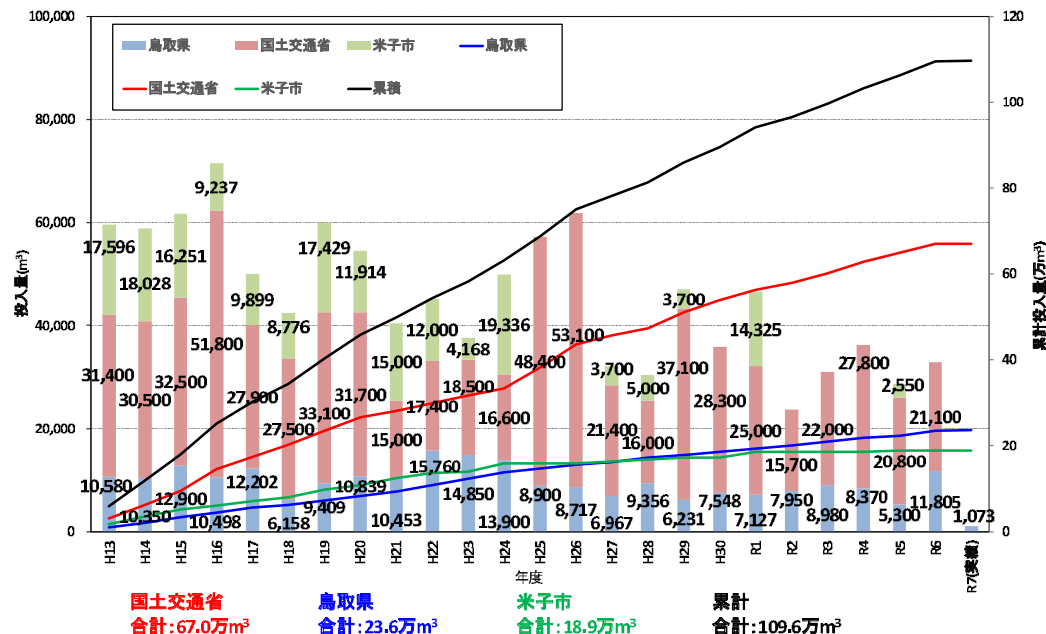
12

【土砂投入実績：R6（2024）年度】

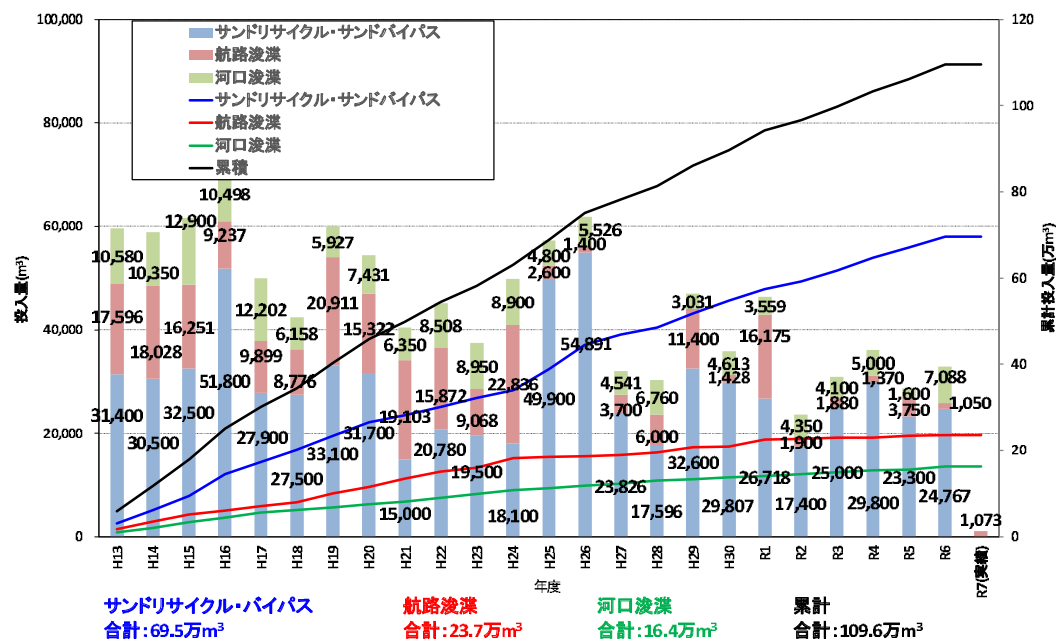
- R6（2024）年度は、合計で32,905m³の土砂投入が行われている。
- 富益工区では21,100m³の養浜が実施された。（P.13参照）
- 両三柳工区は、H27（2015）年度、H28（2016）年度の離岸堤整備以降、土砂投入量が減少傾向にあり、R6（2024）年度には4,607m³のサンドリサイクルが実施されている。（P.14参照）

【土砂投入実績：累積】

- 西部地区におけるH13（2001）年度からR6（2024）年度のサンドリサイクル等による土砂移動量は、合計で約109.6万m³である。
- 実施内容別で移動量が多い順番にみると、サンドリサイクル・サンドバイパスが約69.5万m³と多く、次いで航路浚渫が約23.7万m³、河口浚渫が16.4万m³となっている。
- 実施主体別にみると、国土交通省日野川河川事務所が約67.0万m³、鳥取県が約23.6万m³、米子市（皆生漁港）が約18.9万m³となっている。



土砂移動量の経年変化(実施内容別)



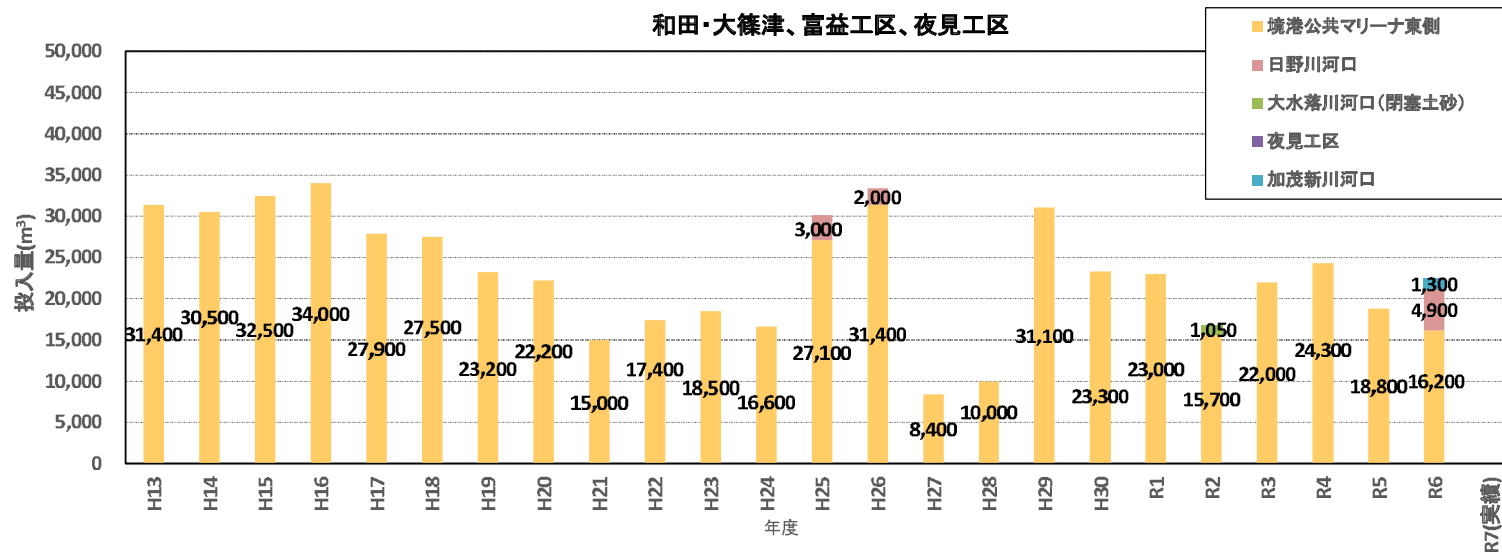
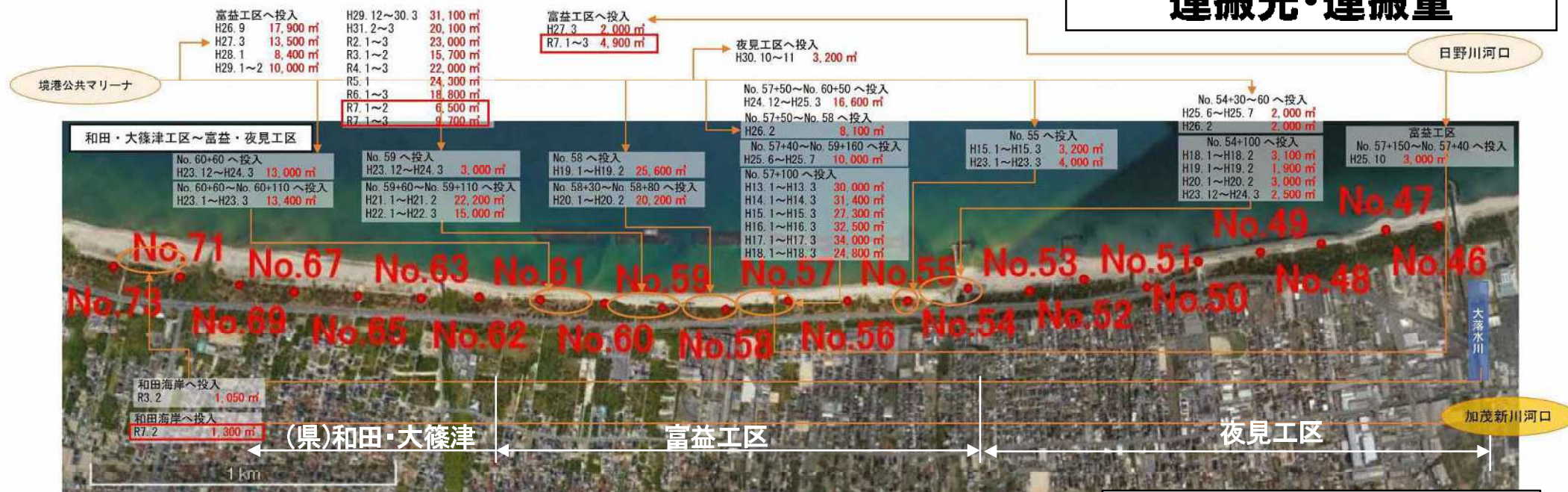
土砂移動量の経年変化(実施内容別)

※投入実績はR7年7月現在

①現状(サンドリサイクル実績) (和田・大篠津工区、富益工区、夜見工区)¹³

・H13年度から境港公共マリーナから富益工区へ毎年土砂投入が行われており、近年は2万³m³前後の土砂が投入されている。

運搬先・運搬量



出典: Google (sf).一部加筆

※投入実績はR7年7月現在

①現状(サンドリサイクル実績)

(両三柳第一工区・両三柳第二工区)¹⁴

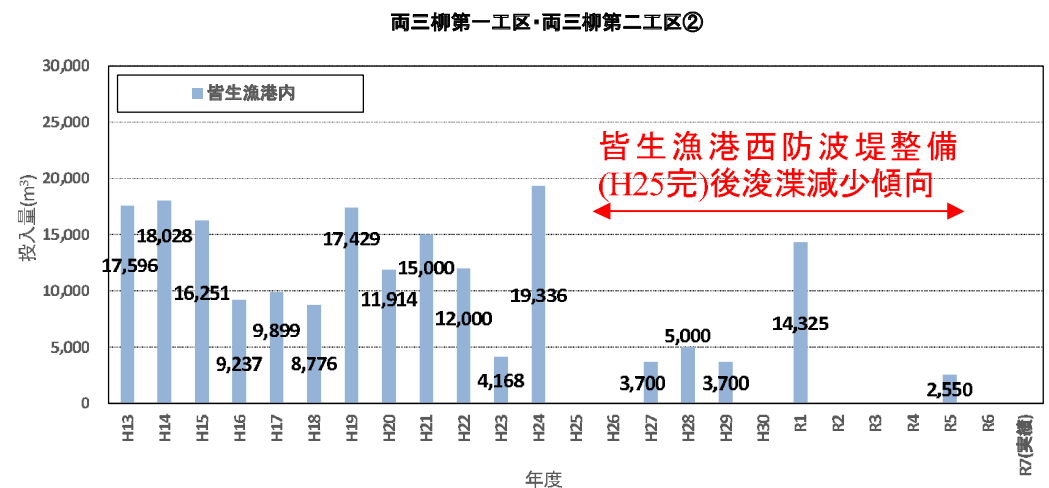
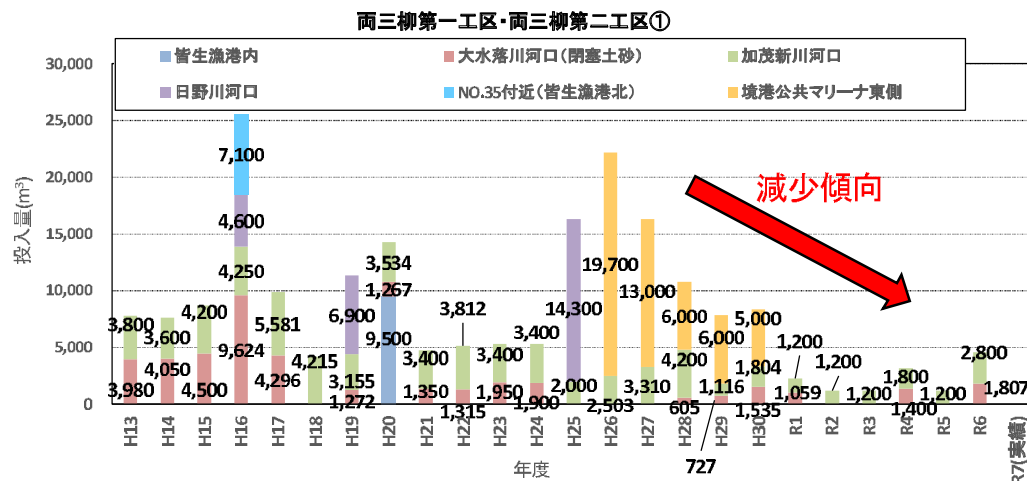
- ・ H27～28年度にNo. 44～45付近の離岸堤が整備されてから、土砂投入量は概ね減少傾向である。
- ・ H25年度に皆生漁港西防波堤整備後、港内の浚渫量は減少傾向にある。

運搬先・運搬量

※R6年度に実施した養浜時期・養浜量を赤枠で記載



出典: Google (sf).一部加筆



※投入実績はR7年7月現在

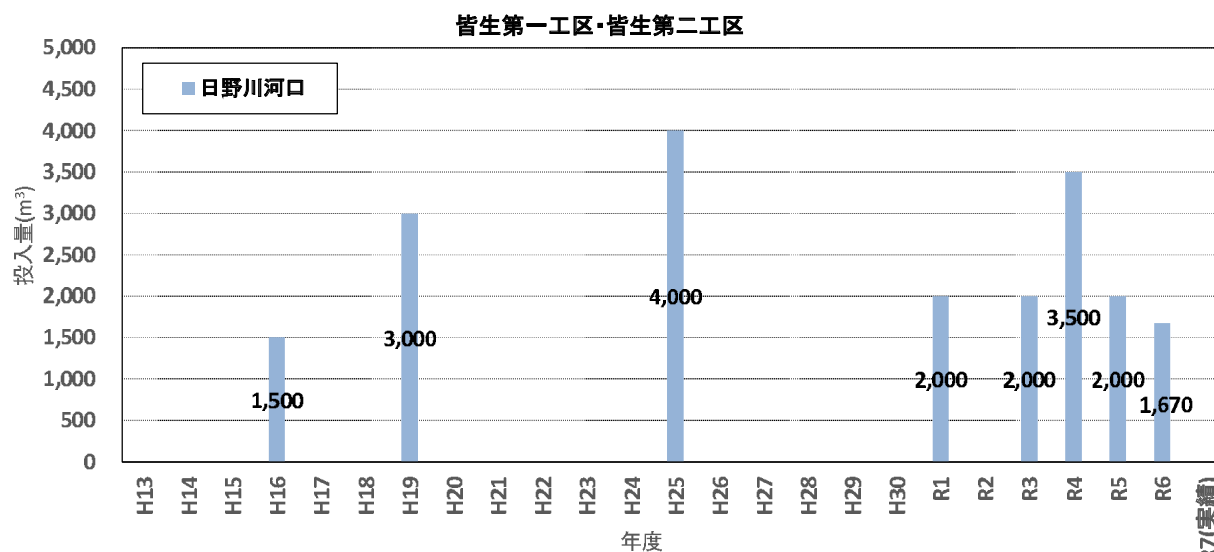
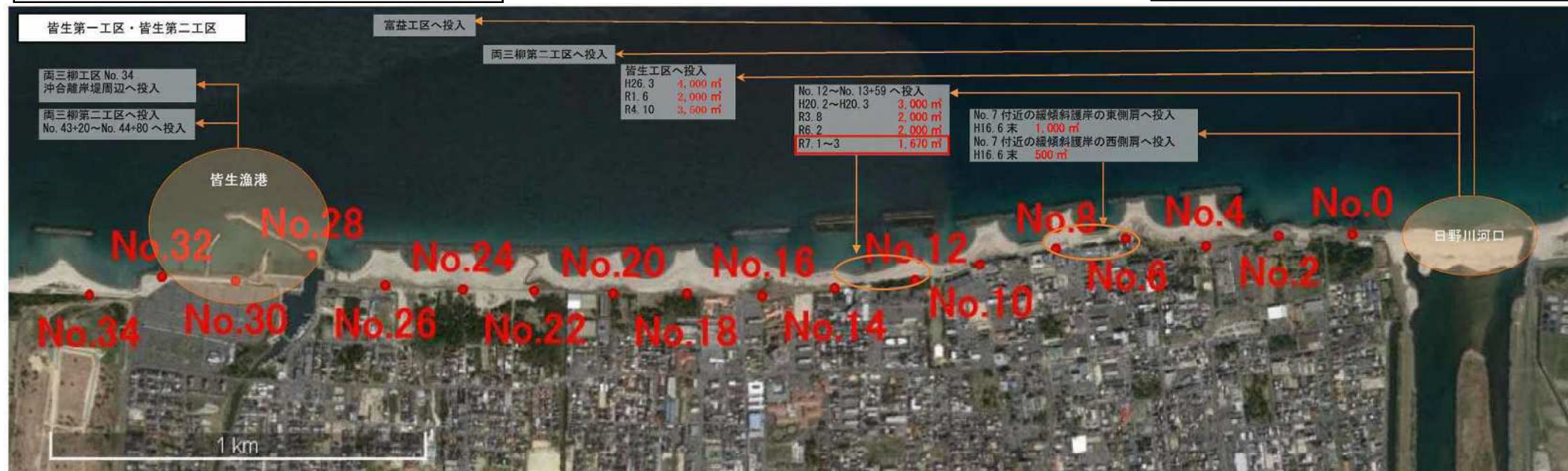
①現状(サンドリサイクル実績)

(皆生第一工区・皆生第二工区) 15

- R6年度は、日野川河口からNo.12～No.13+59付近へ1,670m³の土砂投入が実施された。

運搬先・運搬量

※R6年度に実施した養浜時期・養浜量を赤枠で記載



出典: Google (sf).一部加筆

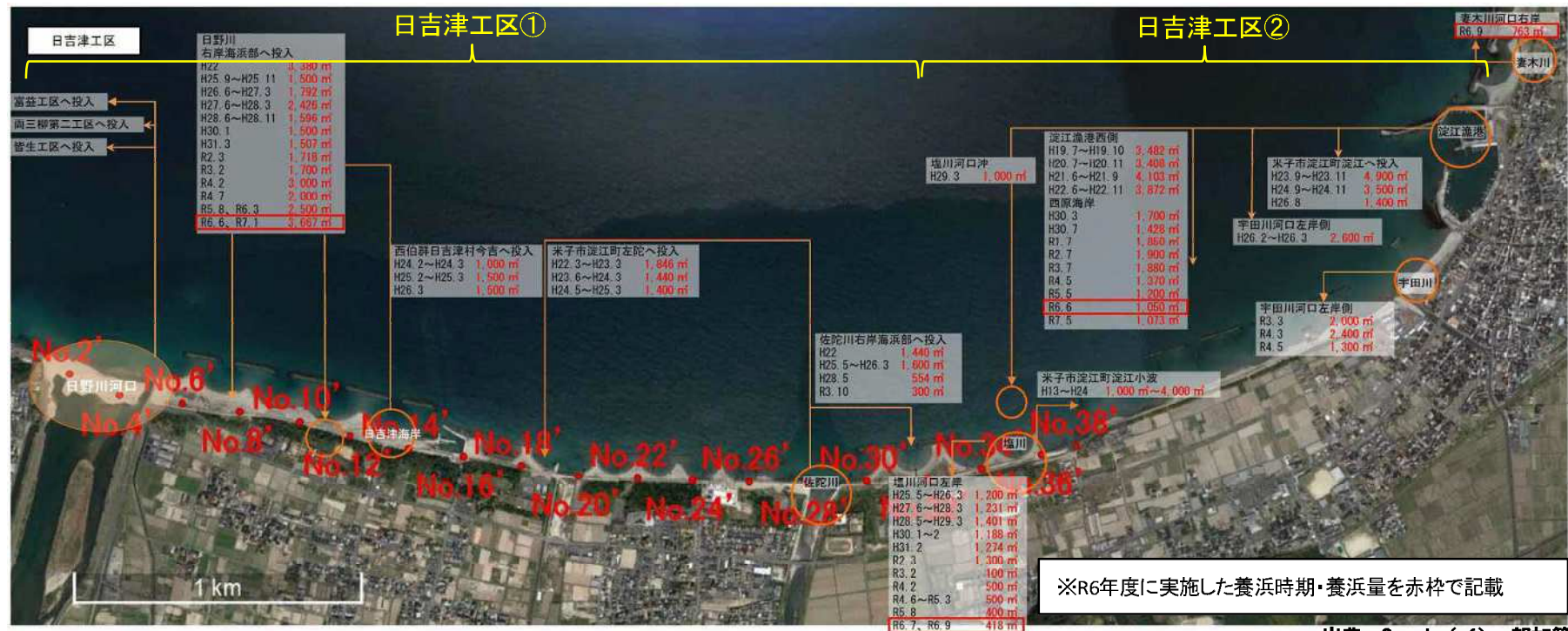
※投入実績はR7年7月現在

①現状(サンドリサイクル実績)

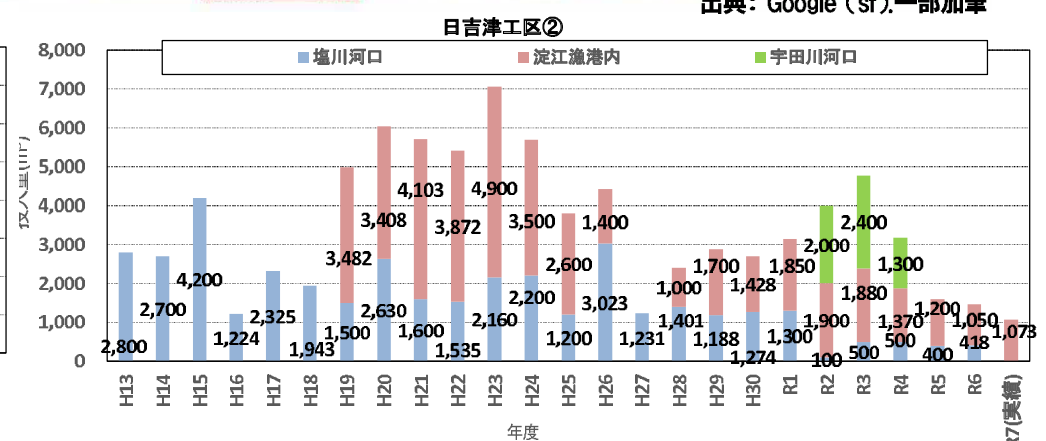
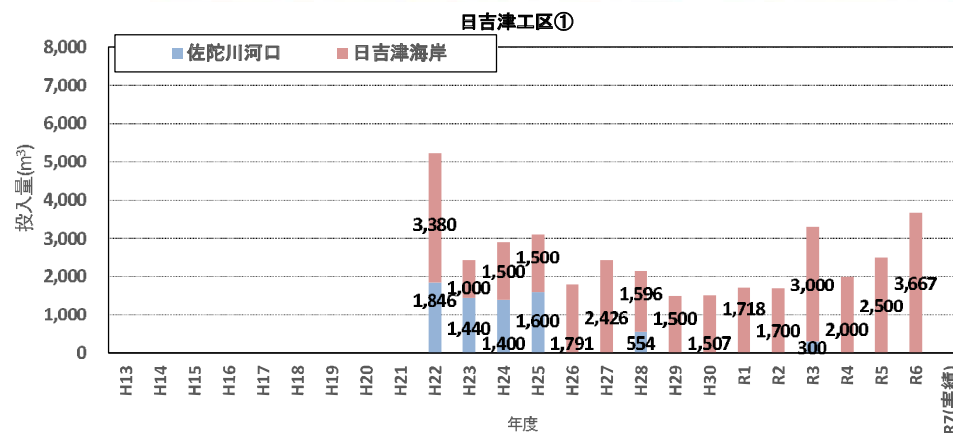
(日吉津工区) 16

- ・R2年度以降、宇田川の河口閉塞が継続的に発生するようになったことなどから、H27年度以降は土砂投入量は増加傾向にあったが、R4年度以降は減少している。

運搬先・運搬量



出典: Google (sf).一部加筆



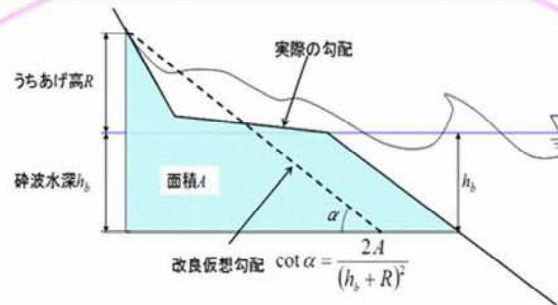
※投入実績はR7年7月現在

➤【参考】鳥取沿岸の目標とする浜幅(目安)

17

- ・ H26 (2014) 年に砂浜管理の目安として、浜幅の目標値を以下の通り定義した。

『防護』で必要な浜幅 ⇒ 25m



『環境』に適した浜幅 ⇒ 施工配慮



海浜に生息する動植物、「白砂青松の海岸」、
「山陰海岸国立公園」等の景勝地に影響のない
浜幅を検討。

越波防止の観点・過去の海岸侵食状況を考慮
して設定。
※越波防止に関しては「中村の仮想勾配法」に
よる波のうちあげ高を算出。

『利用』に適した浜幅 ⇒ 40m



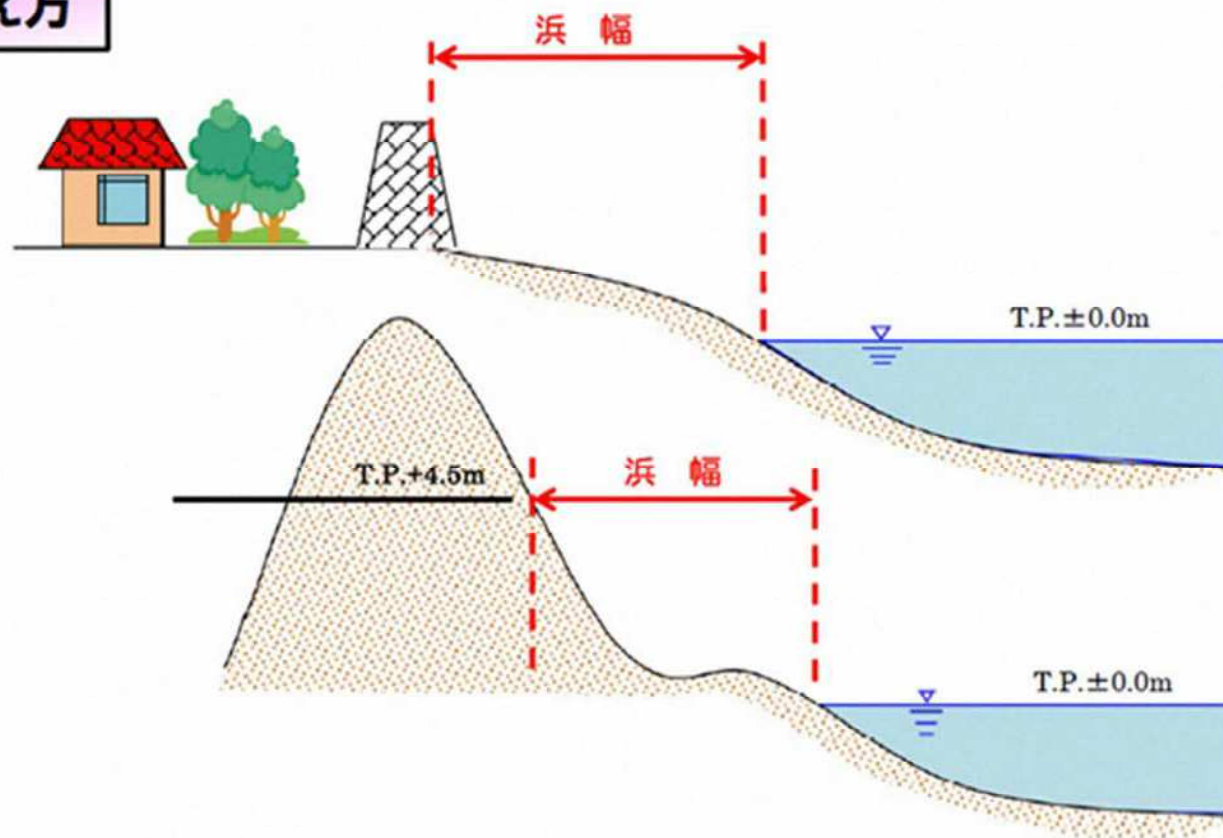
海水浴場・地引網・キャンプ等の海浜レクリ
エーションで利用しやすい浜幅を検討。

「国土交通省港湾局監修(2005.10):ビーチ
計画・設計マニュアル(改訂版)」海水浴客の
海浜幅に対する評価より、40mと設定。

浜幅基準の考え方

堤防の場合

施設なしの場合



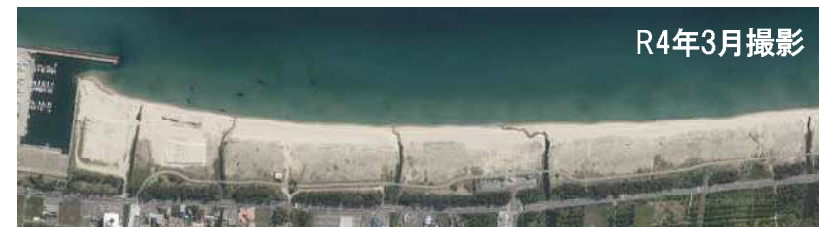
浜幅設定パターン	設定方法
①施設(堤防・護岸)あり	施設の天端法肩からT.P.±0.0mまでの範囲
②施設なし (堤防・護岸隣接)	隣接する施設の法線位置(天端法肩)からT.P.±0.0mまでの範囲
③施設なし ※ (背後地:護岸隣接なし)→鳥取砂丘	現況地形におけるもっとも海側で計画堤防高(T.P.+4.5m)相当の標高位置からT.P.±0.0mまでの範囲

※T.P.+4.5mが確認できない地点は、測量基準線からT.P.±0.0mまでの範囲を算出

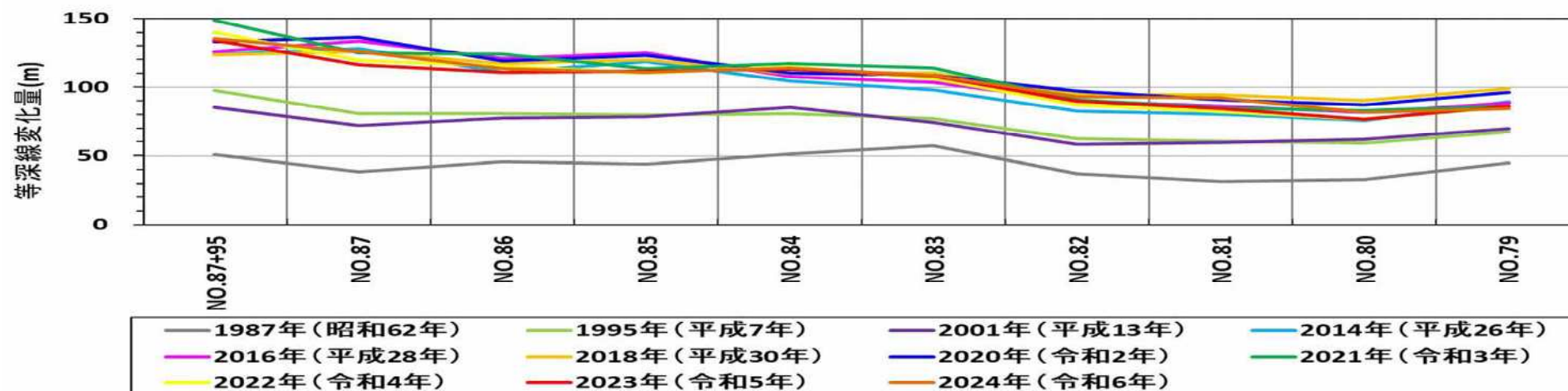
②現状(汀線変化分析・砂浜幅)

汀線変化分析: 沿岸漂砂の最下手に位置しており、堆積傾向にある。
近年、汀線は安定している。

砂浜幅(R6.10): 防護面の目安浜幅(25m)を確保している。

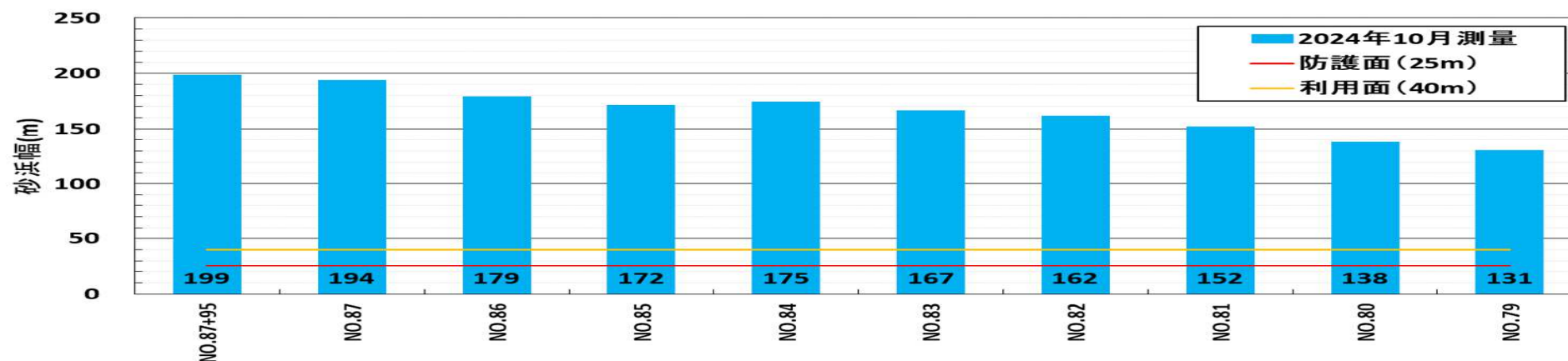


汀線変化分析



※ 保有している測量データで最も古いデータのS49 (1974) 年度を汀線基準に設定。

境港工区の汀線変化量の経年変化(S49年汀線基準)



R6年10月測量時の砂浜幅(境港工区)

※ 赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

砂浜幅

②現状(汀線変化分析・砂浜幅)

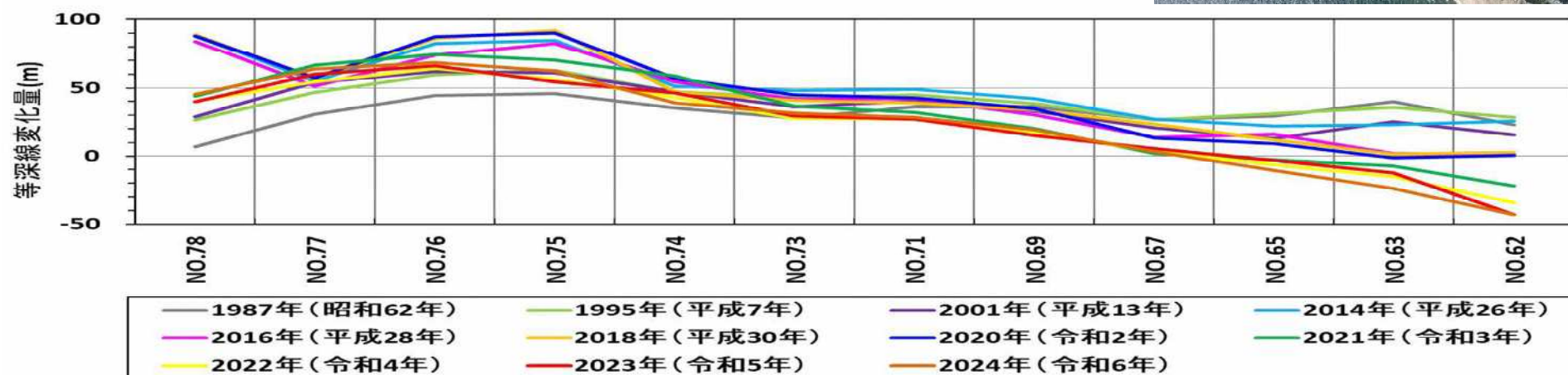
和田・大篠津区間(県管理)²⁰

汀線変化分析: 汀線は、基準年の汀線からは大幅に前進しているが、近年は徐々に後退傾向にある。沿岸漂砂上手側(富益工区)の施設改良の影響により、工区境界(No.62)で汀線が後退傾向にあり、No.62～65ではR3(2021)年以降、基準年の汀線よりも後退している。

砂浜幅(R6.10): No.62～63、No.74で防護面の目安浜幅(25m)を下回っている。

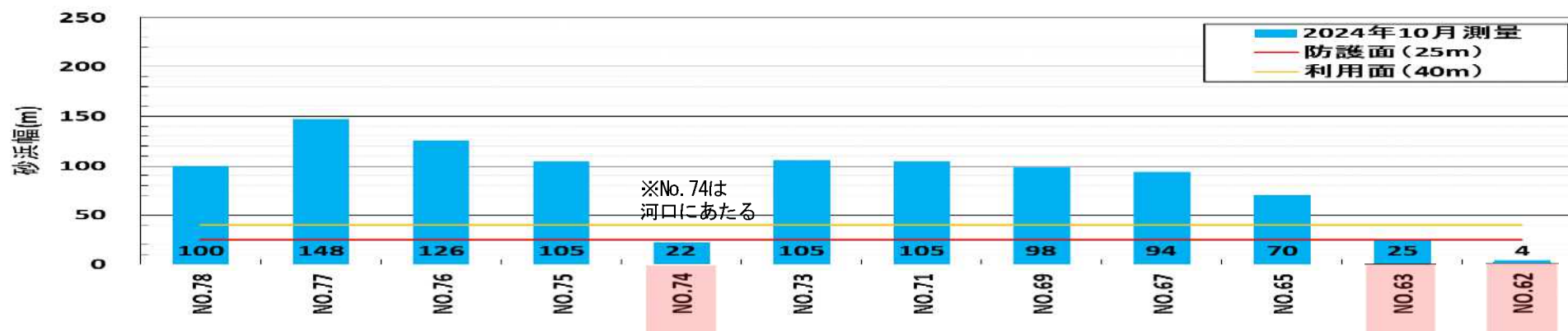


汀線変化分析



※ 保有している測量データで最も古いデータの昭和49年度(1974年)を汀線基準に設定。

和田・大篠津工区の汀線変化量の経年変化(S49年汀線基準)



砂浜幅

R6年10月測量時の砂浜幅(和田・大篠津工区)

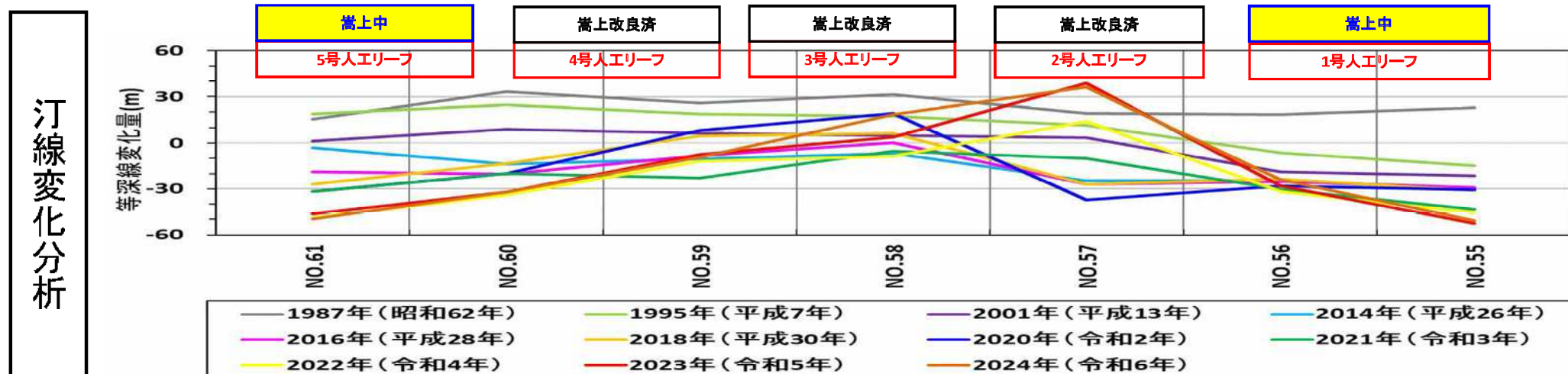
※ 赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

②現状(汀線変化分析・砂浜幅)

汀線変化分析: H16～H23年度(2004～2011年度)にかけて5基の人工リーフ整備に加え、H29(2017)年度から既設人工リーフの天端嵩上を実施しており、R4(2022)年3月時点で計3基の施設改良が完了している。改良前(H28(2016)年)に比べて2号～4号の間は前進傾向、1号の背後及び4号下手側の汀線は後退傾向がみられる。

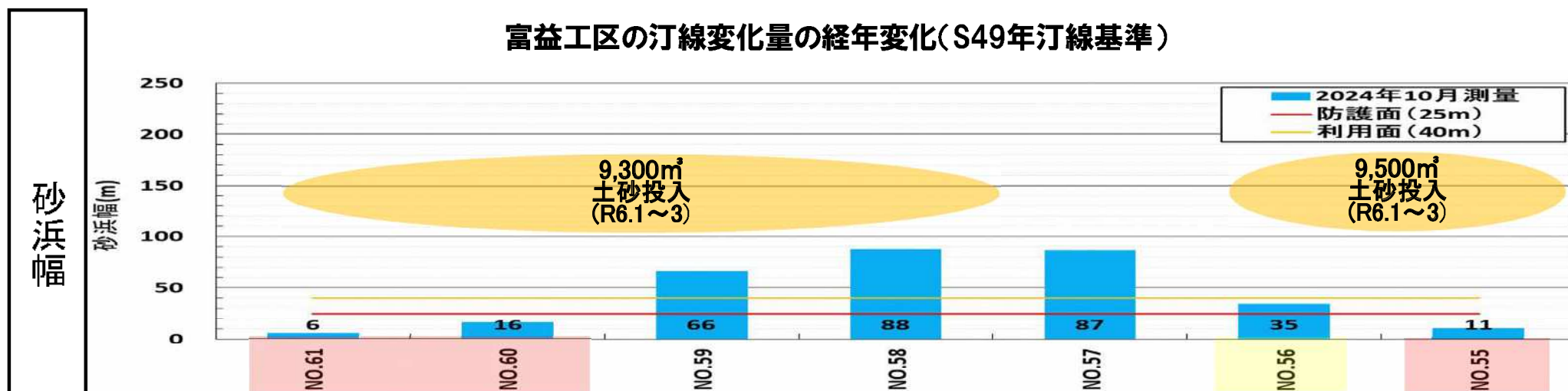


砂浜幅(R6.10): No.55、No.60～No.61で防護面の目安浜幅(25m)を下回っている。



※ 保有している測量データで最も古いデータのS49(1974)年度を汀線基準に設定。

富益工区の汀線変化量の経年変化(S49年汀線基準)

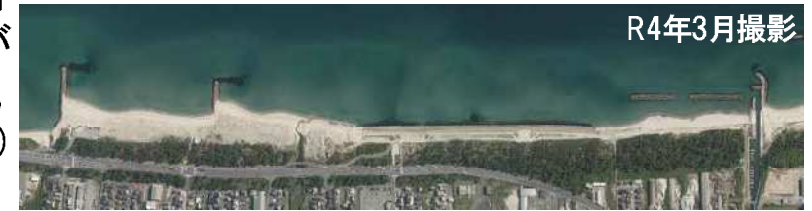


R6年10月測量時の砂浜幅(富益工区)

※ 赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

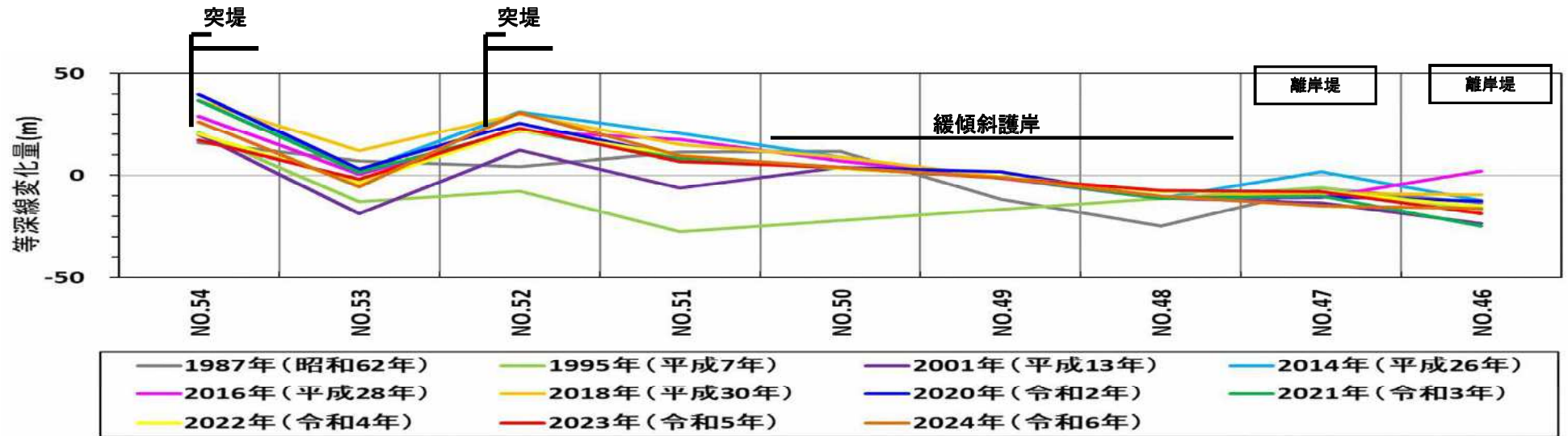
②現状(汀線変化分析・砂浜幅)

汀線変化分析: 突堤が完成したH5(1993)年以降、西側では徐々に汀線が前進し、年によって前進後退があるものの、概ね基準年の汀線を維持している(ただ、突堤の整備により土砂の連続性が絶たれ、下手への土砂供給を阻害している可能性もある)。一方、S55(1980)年に整備された離岸堤の背後(No.46,47)では基準年の汀線よりも後退した状態が継続している。



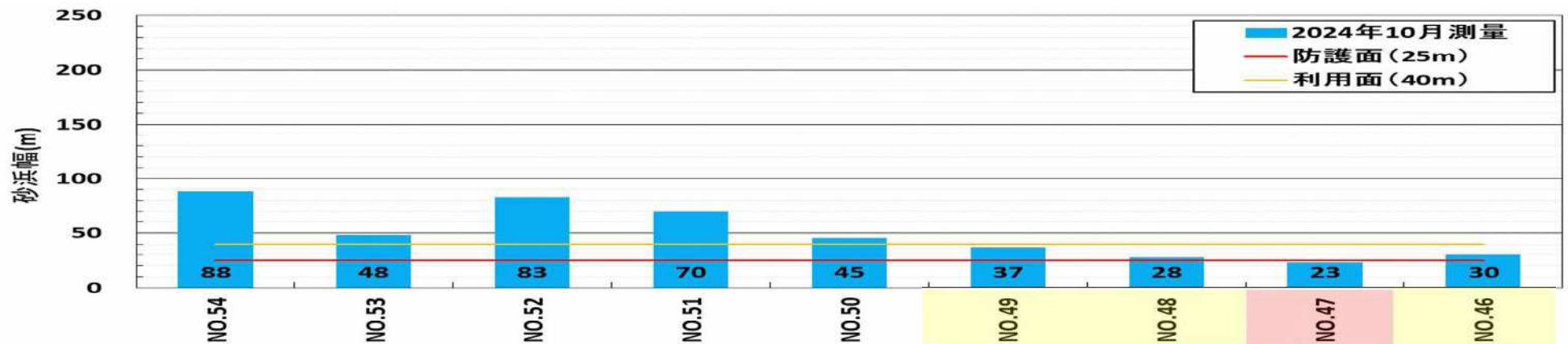
砂浜幅(R6.10): No.47で防護面の目安浜幅(25m)を下回っている。

汀線変化分析



夜見工区の汀線変化量の経年変化(S49年汀線基準)

砂浜幅



R6年10月測量時の砂浜幅(夜見工区)

※赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

②現状(汀線変化分析・砂浜幅)

両三柳工区²³

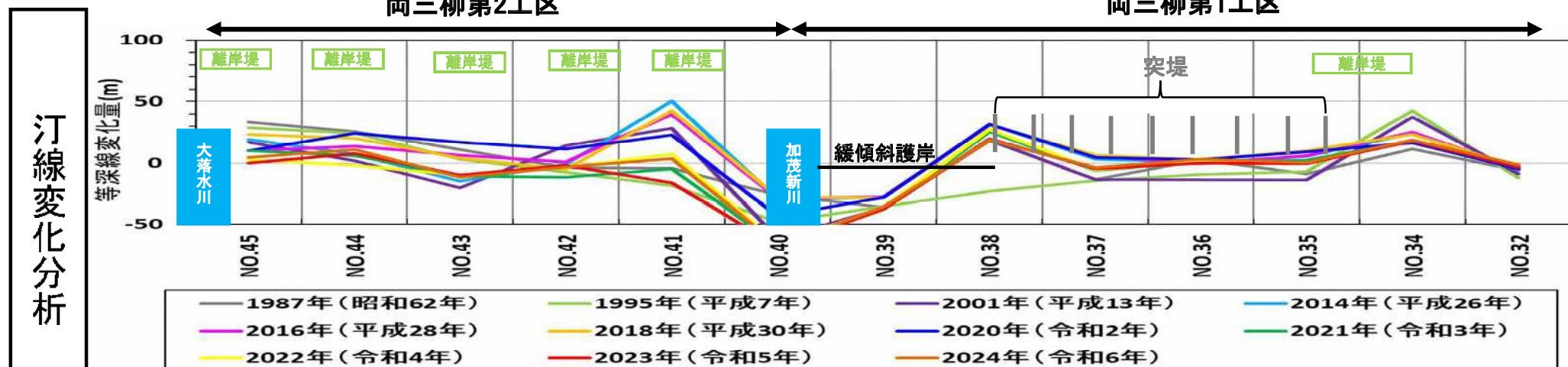
汀線変化分析: 第1工区では、離岸堤、突堤整備によって、汀線変化は全体的に小さく、均衡した状態を保っている。

第2工区では、汀線の年変動が大きいものの、基準年の汀線を概ね維持している。

加茂新川河口付近では、基準年の汀線よりも後退している。これは、隣接する離岸堤の影響と思われる。

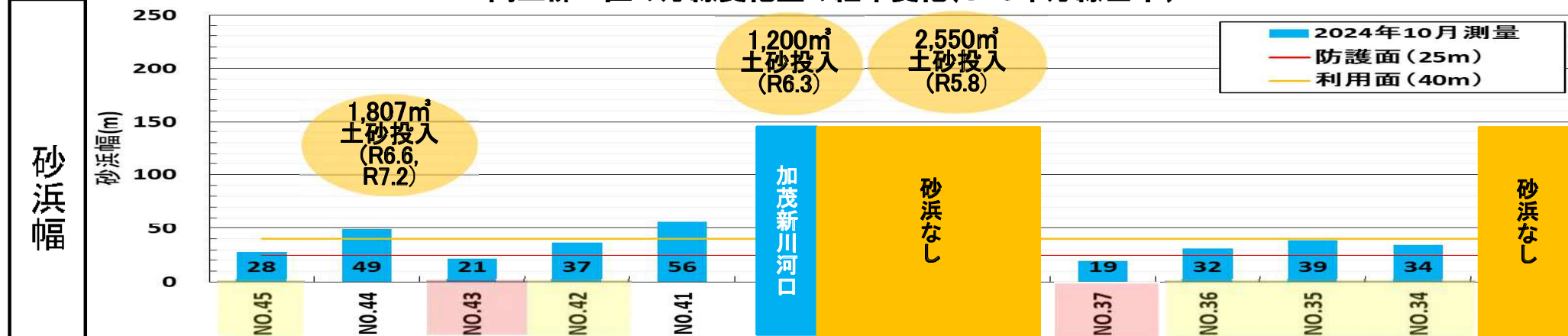


砂浜幅(R6.10): No.37、No.43で防護面の目安浜幅(25m)を下回っている。



※ 保有している測量データで最も古いデータのS49(1974)年度を汀線基準に設定。

両三柳工区の汀線変化量の経年変化(S49年汀線基準)



R6年10月測量時の砂浜幅(両三柳工区)

※ 赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下